

## 看護系大学の初年次教育への取り組みと課題

—初年次教育を担当する看護教員へのインタビュー調査から—

# Effectivenesses and Issues of First-Year Experience at Universities and Colleges in under-graduate school of Nursing

— From interview with Nursing faculties in charge —

市原 真穂<sup>1)</sup>・富樫 千秋<sup>1)</sup>・吉野 由美子<sup>1)</sup>・岩瀬 靖子<sup>2)</sup>・池邊 敏子<sup>1)</sup>

Maho ICHIHARA, Chiaki TOGASHI, Yumiko YOSHINO, Seiko IWASE  
and Toshiko IKEBE

本研究の目的は、看護系大学の初年次教育の取り組みについて、背景や現状、効果があった内容とその成果、および今後の課題や展望を記述することである。初年次教育を担当する6大学の教員、6名に半構造化インタビュー調査を実施した。

その結果、763コードから50サブカテゴリ、14カテゴリが得られた。初年次教育の背景と現状として、6カテゴリ【大学への適応に支援を要する学生】【学生の環境適応に向けたケアの必要性】【大学教育の質的転換への対応】【学生の主体的・能動的な態度醸成を意図】【特別な配慮、個別的な支援を必要とする学生への支援体制づくり】【大学教育の意味に基づいた学生の価値の醸成を意図した働きかけ】が示された。初年次教育の効果として、5カテゴリ【初年次教育の学生への効果】【学生のキャリア形成への効果】【教員への波及効果】【組織への効果】【初年次教育の仕組みへの波及効果】が示された。初年次教育の課題と展望は、3カテゴリ【入学前から卒業までの一貫した学生支援の仕組みの確立の必要性】【より効果的な教育方法の検討】【カリキュラムの質担保の困難】が示された。

本研究により、学生の多様化するニーズに応じた初年次教育の取り組みへの示唆が得られた。

### 1. はじめに

2000年以降、少子化の影響を受けて大学全入時代を迎えた。このような背景の中、2018年には全国の看護系大学は276大学となった。毎年の入学生には、「看護

職」としての自己の将来像や、「看護師になる」という目的意識をもつ者が多い<sup>1)</sup>。しかし、「看護師になる」という目的は明確化されていたとしても、学習習慣の身につけていない学生や、大学教育への適応に課題を抱える学生が入学していることも否めない。中央教育審議会は「学士課程教育の構築に向けて」<sup>2)</sup>において、初年次教育の必要性を提言した。そしてその位置づけを「高等学校から他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」とした。

看護系の教育課程を有する大学は、我が国の大学の3

連絡先：市原真穂 michihara@cis.ac.jp

1) 千葉科学大学看護学部看護学科

Department of Nursing, School of Nursing,  
Chiba Institute of Science

2) 千葉大学大学院看護学研究科 博士後期課程

Doctrnal course, Graduate School of Nursing,  
Chiba University

(2019年9月30日受付, 2020年1月24日受理)

校に1校あるという現状を鑑みると、看護系大学において初年次教育の充実を図り、効果的な方策を探究していくことは、当該学部・学科のみならず、当該大学、延いては高等教育における初年次教育の在り方について示唆を与える可能性もある。

看護系大学の初年次教育の授業形式は、ゼミナール型69.9%、スキル・方法論型10.9%、基礎・概論型8.7%、情報リテラシー型6.5%に分けられるという調査結果がある<sup>3)</sup>。また初年次教育において教員が重要視していることは、5段階評価の平均値で「学習スキル」4.28点、「情報支援活用スキル」3.65点、「スチューデント・ソーシャルスキル」3.65点、「教科補習」3.33点の順であったという報告がある<sup>4)</sup>。しかしながら、全国の看護系大学を対象とした効果的な初年次教育の取り組みの実態を明らかにした研究は見当たらなかった。初年次教育は、志の高い学生の志気向上にはなっても、それが多くの課題を抱える学生への効果的な方策になっているという十分な示唆は得られていない。また、これまで初年次教育の授業形式、教員が重要視していることの実態を明らかにした研究はあるが、全国の看護系大学を対象とした効果のあった取り組みの実態を明らかにした研究は見出せなかった。

本研究に先立ち、2017年度は独自の質問紙による全国看護系大学の初年次教育の実施の有無や焦点化を要する課題を抽出する実態調査を行なった<sup>5)</sup>。その結果、86.3%の看護系大学が初年次教育を行っており、初年次教育の内容は多い順に「課題に対するレポート」、「グループ学習」、「図書館の使い方」であったこと、また、45.7%の大学が、「自学部の教育についていける水準にまで学生の学力を引き上げることができなくても、すべての新入生の面倒をみる」ということを基本的スタンスで実施していることを明らかにした。この結果をさらに深め、学生の課題に即した初年次教育の方向性や在り方を示し、学士力を高め、高い土台に看護学教育を積み上げるための課題を抽出し、具体的な方策につなげる必要がある。

そこで本稿では、看護系大学において行われている初年次教育について、近年の学生の特性を踏まえた大学教育への円滑な移行や汎用性技能の修得にむけた取り組み、すなわち具体的な取り組みの内容や方法、工夫した点にはどのようなものがあり、また、どのような効果があったのかという点について、授業内容やカリキュラム構築に資することができるように書き表すことを試みる。

本研究により、看護系大学の初年次教育の効果的な方策が明らかになることは、学士課程における看護学教育の意義をより明確にすると考えられる。また、今回の結果について、先に示した量的研究<sup>5)</sup>での知見とあわせ検討していくことで、より現実に即した実効性の高い初年次教

育の内容や方法が明らかとなるだろう。

## 2. 研究目的

本研究の目的は、看護系大学の初年次教育の取り組みについて、背景や現状、効果があった内容とその成果、および、今後の課題や展望を記述することである。

## 3. 研究方法

### 3.1 研究デザイン

本研究の研究デザインは、探索的、質的記述的デザインである。

### 3.2 研究参加者

研究参加者は、看護系大学で実施した初年次教育の取り組みに関するインタビュー調査協力の依頼に応じた初年次教育担当教員である。

### 3.3 研究参加依頼の手順

2017年度実施した調査<sup>5)</sup>の報告書を全国の看護系大学271校に送付した際に、本研究参加の説明文および意向確認書を同封し、研究参加の意思がある場合には、郵送での返信を依頼した。

返送があった各初年次教育担当者と直接コンタクトを取り、研究参加の意思を確認した。研究者が、当該研究参加者の指定する場所へ赴き、文書および口頭で研究の趣旨および目的等を説明し、署名により研究参加の同意を得た。

### 3.4 データ収集方法

データ収集期間は、2018年12月から2019年3月であった。

データ収集は、半構造化面接法を用いた。本研究では、実際に初年次教育を実践している教員の認識や、初年次教育における教育的洞察を描き出すことを意図している。半構造化面接法では、大まかな方向性を定めたインタビューガイドに従って質問し対話や語りの流れに合わせて質問を変化させ、柔軟に意見を聞き取ることができるので、本研究の主旨に合致している。

インタビューガイドは、先行研究や先行する取り組み、2017年度実施の量的調査<sup>5)</sup>の結果だけでは明らかになっていない、初年次教育を実施する際の各大学の工夫や大事にしていることや課題についてその前後の文脈も含めて描き出すために、研究者間で討議して以下のように決定した。研究目的に沿った3つのパート、すなわち、初年次教育の背景や現状、効果があった内容とその成果、および今後の課題や展望を記述するために下記の質問項目を挙げた。面接時には研究参加者の自由な語りを妨げないように語られる内容に沿って語りが深まるように質

問内容を適宜変化，調整しながら面接を実施した。

#### 1) 初年次教育の背景や現状

- ・学科に入学する学生が抱える課題はどのようなものか。
- ・初年次教育をはじめたきっかけはどのようなものか。

#### 2) 効果があった内容とその成果

- ・初年次教育をどのように取り組んでいるか(目的、目標、内容、従事者、実施時期、検討組織の有無等)。
- ・初年次教育で大事にされていることはどのようなことか。
- ・初年次教育で工夫されていることはどのようなことか。
- ・初年次教育の効果をどのようなところで感じているか。

#### 3) 今後の課題や展望

- ・初年次教育の課題はどのようなことか。

上記に加え，研究参加者の属する学科の背景，研究参加者のデモグラフィックデータを得た。

### 3. 5 データ分析方法

インタビューは了承を得て録音し，逐語録を作成した。逐語録を繰り返し読み，初年次教育の取り組みの背景を十分に理解した上で，逐語録から意味のある文節を取り出し簡潔な表現に置き換えコードとした。その際には，研究参加者自身の表現を可能な限り用いた。コードの共通性，相違性を検討し，類似するコードを集め抽象度を高めた。研究参加者ごとに抽象度を高めたのちに，全体を統合した。

データ分析は，研究チームで討議しながら行いデータの信用性，信憑性，確証性，および転用可能性を確保した。

### 3. 6 倫理的配慮

研究参加者には，研究の趣旨，プライバシーの保護の匿名性の確保，研究協力中断の保証，データの管理方法について文書を用い口頭で説明し，同意書への署名を得た。

なお，本研究は研究代表者が所属する施設の研究倫理審査委員会の承認を経て実施した。(番号 No.30-5 2018年10月5日承認)

## 4. 結果

### 4. 1 対象の概要

研究に参加した初年次教育担当教員は6大学6名であった。設置主体の内訳は，公立大学2校，私立大学4校であった。単科大学3校，複数の学部で構成されている大学が3校であった。研究参加者は全員が管理的立場であった。

全ての大学で，新生の入学直後の時期に初年次教育を開講していた。そのうち，2校は正規の必修科目としての位置づけであった。

初年次教育担当教員の語りから，763コード(以下「」で示す)が得られ，50サブカテゴリ(以下《》で

示す)から，14カテゴリ(以下【】で示す)が抽出された。また，インタビューガイドは，研究目的に沿って3つのパート，すなわち，1) 初年次教育の背景や現状，2) 効果があった内容とその成果，3) 今後の課題や展望，から構成したものであるため，3つのパートに分けてそれぞれのパートに含まれるカテゴリの内容を説明する。

### 4. 2 初年次教育の背景と現状(表1参照)

初年次教育の背景と現状は，6つのカテゴリから構成されている。カテゴリには【大学への適応に支援を要する学生】【学生の環境適応に向けたケアの必要性】【大学教育の質的転換への対応】【学生の主体的・能動的な態度醸成を意図】【特別な配慮，個別的な支援を必要とする学生への支援体制づくり】【大学教育の意味に基づいた学生の価値の醸成を意図した働きかけ】が含まれる。

#### 4. 2. 1 カテゴリ1 【大学への適応に支援を要する学生】

【大学への適応に支援を要する学生】は，4つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《環境への適応に支援が必要な学生》《基礎学力や学習スキルが身につけていない学生》《生活態度やソーシャルスキルに課題を持つ学生の増加》《大学での学びに向けた意思や動機付けに支援が必要な学生の増加》が含まれる。

《環境への適応に支援が必要な学生》は，「入学後に大学の個性や雰囲気は驚く学生がいる」など，環境変化に戸惑い環境適応に支援を要する学生の増加を示している。《基礎学力や学習スキルが身につけていない学生》は，一般入試を経験せずに入学する学生の増加などを反映し，基礎的な学力や学習スキルが不足する学生の増加を示している。《生活態度やソーシャルスキルに課題を持つ学生の増加》は，自立した生活習慣や，社会生活に必要な生活スキルやコミュニケーションスキルが不足する学生の増加を示す。《大学での学びに向けた意思や動機付けに支援が必要な学生の増加》は，自らが望む大学に入学できなかったという不本意入学どころか，親に勧められたなど，入学する気持ちや希望，期待すらもない「無本意入学が増えた」など，勉学への意欲や，将来の職業へのイメージがないまま入学する学生が増加していることを示す。

#### 4. 2. 2 カテゴリ2 【学生の環境適応に向けたケアの必要性】

【学生の環境適応に向けたケアの必要性】は，3つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《新生を歓迎する雰囲気作り》《学生の仲間づくりを意図したプログラム》《学生が相談しやすい体制づくり》が含まれる。

表1. 初年次教育の背景と現状

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的なコード ( )内は研究参加者ID
大学への適応に支援を要する学生	環境への適応に必要な学生	<ul style="list-style-type: none"> <li>入学後に大学の個性や雰囲気に関心する学生がいる。(A)</li> <li>生活面の指導も教員が抱え込んでいる。(D)</li> </ul>
	基礎学力や学習スキルが身につけていない学生	<ul style="list-style-type: none"> <li>論理的思考、批判的思考など能力に差がある。(A)</li> <li>学習習慣の差がはっきりと出始めた。(B)</li> <li>暗記型の勉強しかしてこない学生が多い。(C, F)</li> <li>受験勉強をしていないので、日本語能力が低く、学習目的が曖昧。(D)</li> <li>入学時に学力差がある。(F)</li> </ul>
	生活態度やソーシャルスキルに課題を持つ学生の増加	<ul style="list-style-type: none"> <li>根本的な生活態度や、生活行動について課題のある学生がいる。(A)</li> <li>しつけ教育の必要性がある。(D)</li> <li>報告連絡相談できるように教育する必要がある。(D)</li> <li>実習の場面だけではなく、社会人としてマナーが不足している。(E)</li> <li>コミュニケーションが取れずにグループワークできない学生の増加。(F)</li> </ul>
	大学での学びに向けた意思や動機付けに支援が必要な学生の増加	<ul style="list-style-type: none"> <li>無本意入学者が増えた。(B, E)</li> <li>看護師になりたい学生が1/3、これから考えようとしている学生が1/3、偏差値や授業料、親の期待で入学した学生が1/3。(C)</li> <li>学習の必要性の理解と能動的な学習態度が見られないという学生がいる。(D, F)</li> <li>入学時から看護職として振舞っていく必要があるため、初年次教育は大事なきっかけになる。(E)</li> </ul>
学生の環境適応に向けたケアの必要性	新入生を歓迎する雰囲気作り	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育環境への適応。(B)</li> </ul>
	学生の仲間づくりを意図したプログラム	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生同士の親睦を深め大学を知ることを中心に共同で取り組むアクティビティを企画に取り入れている。(A)</li> </ul>
	学生が相談しやすい体制づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生にとって相談できる窓口が増えることを意図して、クラス担任とチューター制度を併用した体制をとっている。(A)</li> </ul>
大学教育の質的転換への対応	大学教育および大学改革における国の方針の反映	<ul style="list-style-type: none"> <li>国の方針を考慮し、学科長の呼びかけにより初年次教育として取り組みを開始した。(A)</li> <li>開設時より高大接続教育ということで始まった。(B, E)</li> <li>創立時から学び方を学ぶ手法を仕組みとして入れてある。(C)</li> </ul>
	初年次教育プログラムの構築とカリキュラム上の位置付け	<ul style="list-style-type: none"> <li>コアメンバーを中心に、文献検討から始めた。(A)</li> <li>初年次教育構築のために海外の大学に研修に行った。(C)</li> <li>入学時オリエンテーションの取り組みを初年次教育に位置付けた。(A)</li> <li>単位として認められるように位置付け、成績も出している。(B)</li> <li>関連科目とのつながりを考えて組み立てた。(F)</li> </ul>
	初年次教育のビジョンと考え方の共有と仕組みづくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>FDの場を活用し、共有および情報交換を行った。(A)</li> <li>初年次教育のために教員研修の実施が必要だった。(C)</li> </ul>
	持続可能な初年次教育への仕組みづくりとその困難	<ul style="list-style-type: none"> <li>初年次教育の評価を入学後3ヶ月、1年後に行い調査し、次年度への改善につなげる仕組みを作っている。(A)</li> <li>開設当時の教員から代わると、継続が難しい。(C)</li> <li>初年次教育を一人で担当している現状がある。(D)</li> <li>教員が順番で担当している。(E)</li> </ul>
学生の主体的・能動的な態度醸成を意図	学生の主体性に働きかける教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生が主体になれるように自己紹介のプレゼンを行う企画を取り入れている。(A)</li> <li>チームビルディングしながら、課題達成型のプロブレムベースドラッシングを行い、その過程をポートフォリオにファイリングする。(B)</li> <li>教員はファシリテートに徹し、答えを絶対に導き出すようなことはしない。(B)</li> <li>学生に喋らせて、「その根拠は」と聞く教員のところは、学生が考える時間が長くなる。(C)</li> <li>学生に自己効力感を持たせる工夫をしている。(D)</li> </ul>
	教員が学生を信じることの重要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生には、あなたはできるって伝えると、本当にできるようになっていく。(B)</li> </ul>
	グループダイナミクスによる学生一人ひとりに自分の役割を意識させる教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>チーム学習で学生は誰一人として要らないという人はいないことを意識させる。(B)</li> <li>人を認め合うということと、その時々で教員がその雰囲気を出す。(B)</li> </ul>
	学生の失敗をも学習の機会として捉える雰囲気づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生が失敗しても、それを学習の機会として捉えフォローしている。(A)</li> <li>学生たちは、絶対答えがある中で学習してきているので「失敗している」とか「何で質問をしていい」とか、そんな環境づくりで自由に学習ができるような環境を伝えている。(B)</li> </ul>
	どんな時でも学生が意見や考えを他者に表現できることを大事にした働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>意見や考えを他者に表現することができるということを大事にし、授業中は「質問ありますか」と投げかける時間をたくさん設けている。(B)</li> <li>グループ学習を増やしたのは、知らないことを知る喜びをグループで意見交換しながらやって欲しかったから。(F)</li> <li>グループ学習を増やしたのは、看護の対象者にはいろいろな方たちがいて、違いを理解し、違いの中で自分の主張をしたり、相手を受け入れることが続いていく仕事であるから。(F)</li> </ul>
	多様な準備状況にある学生が一緒に受ける初年次教育の意味づけを考える必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>様々な意欲や学習習慣の学生と一緒に初年次教育を受ける意味を考えながら実施している。</li> <li>チーム学習と個人学習を並行して実施している。(B)</li> <li>いろいろな人がいていいということに触れられるようにごちゃ混ぜのグループで体験できるようにしている。(F)</li> </ul>
	学習の成果の評価を教員と共有することによる目標の明確化	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員と学生とで達成目標をはっきりとさせることが、決め手である。(B)</li> </ul>
学生が学び方を学ぶための支援	学習の成果の評価を教員と共有することによる目標の明確化	<ul style="list-style-type: none"> <li>ノートテイキングは、一字一句ではなく、こういうところがあつたと教える。(B)</li> <li>PBLは学び方を学ぶというのがベースになっている。(C, F)</li> </ul>
	学習の成果の評価を教員と共有することによる目標の明確化	<ul style="list-style-type: none"> <li>初年次教育では、レポートの書き方など、アカデミックスキル、スタディスキルの学習を行う。(B, D, E, F)</li> <li>初年次教育は社会人基礎力、看護者基礎力のベースみたいなものである。(D)</li> <li>社会人としてのマナーのことは教育内容にずっと入れている。(E)</li> <li>情報活用演習、日本語表現、日本語読解演習を行なっている。(F)</li> </ul>
	社会人基礎力の醸成	<ul style="list-style-type: none"> <li>初年次教育は学生自身の看護観や大学への所属意識を醸成する上で重要である。(A)</li> <li>現代社会の問題を考察し、専門教育への興味関心を喚起させ、大学教育の礎とする。(B)</li> <li>社会貢献をテーマにプロジェクト学習を行なっている。(B)</li> <li>20年前とは、学び方に対するコミットメントが違っている。(C)</li> <li>10年先、20年先を見据えるものだと思う。(C)</li> <li>臨床に出せるかという観点で学生を見る。(D)</li> <li>看護は、入学した時から高度職業人養成コースがあるので、そこを特化していく必要があったのではない。(E)</li> <li>安全や命が初年次教育の3本柱である。(E)</li> </ul>
特別な配慮、個別的な支援を必要とする学生への支援体制づくり	初年次教育を通して把握した個別的なフォローが必要な学生支援の仕組みづくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>フォローが必要な学生に関しては初年次教育に限らず学生委員会と連携し情報共有を行う仕組みを作っている。(A)</li> <li>気になる学生について教員間で情報交換をしている。(F)</li> </ul>
	大学教育の意味に基づいた学生の価値の醸成を意図した働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>初年次教育は学生自身の看護観や大学への所属意識を醸成する上で重要である。(A)</li> <li>現代社会の問題を考察し、専門教育への興味関心を喚起させ、大学教育の礎とする。(B)</li> <li>社会貢献をテーマにプロジェクト学習を行なっている。(B)</li> <li>20年前とは、学び方に対するコミットメントが違っている。(C)</li> <li>10年先、20年先を見据えるものだと思う。(C)</li> <li>臨床に出せるかという観点で学生を見る。(D)</li> <li>看護は、入学した時から高度職業人養成コースがあるので、そこを特化していく必要があったのではない。(E)</li> <li>安全や命が初年次教育の3本柱である。(E)</li> </ul>
正解のない問いに対する答えを考え続けていく必要性の伝達	初年次教育を通して把握した個別的なフォローが必要な学生支援の仕組みづくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>一貫して、大学教育は答えがないことへの問いを出していくということが求められているということと話している。(B)</li> </ul>
	建学の理念の実現に向けた働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>理念である「連携と統合」ができるようにそれぞれの専門職の能力と協働する能力を作ることが目的だった。(C)</li> </ul>



このカテゴリは、学生が早期に環境適応するための取り組みである。《**新入生を歓迎する雰囲気作り**》および《**学生の仲間づくりを意図したプログラム**》は、学生が新しい環境で早期に居場所を見つけるための取り組みである。《**学生が相談しやすい体制づくり**》は、「学生にとって相談できる窓口が増えることを意図して、クラス担任とチューター制度を併用している」など、学生が問題や課題を抱え込まずに早期に適切な支援につながるように、学生にとって相談しやすい体制づくりを意図した取り組みである。

#### 4. 2. 3 カテゴリ3 【大学教育の質的転換への対応】

【**大学教育の質的転換への対応**】は、4つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《**大学教育および大学改革における国の方針の反映**》《**初年次教育プログラムの構築とカリキュラム上の位置付け**》《**初年次教育のビジョンと考え方の共有と仕組みづくり**》《**持続可能な初年次教育への仕組みづくりとその困難**》が含まれる。

《**大学教育および大学改革における国の方針の反映**》および《**初年次教育プログラムの構築とカリキュラム上の位置付け**》は、国の方針や学生の特性に応じて、初年次教育の仕組みづくりのきっかけとその取り組みを示す。《**初年次教育のビジョンと考え方の共有と仕組みづくり**》および《**持続可能な初年次教育への仕組みづくりとその困難**》は、初年次教育に向けた準備段階、および数年先を見て継続的に取り組みを行なっていくための実践や工夫を示す。

#### 4. 2. 4 カテゴリ4 【学生の主体的・能動的な態度醸成を意図】

【**学生の主体的・能動的な態度醸成を意図**】は、9つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《**学生の主体性に働きかける教育**》《**教員が学生を信じることの重要性**》《**グループダイナミクスによる学生一人ひとりに自分の役割を意識させる教育**》《**学生の失敗をも学習の機会として捉える雰囲気づくり**》《**どんな時でも学生が意見や考えを他者に表現できることを大事にした働きかけ**》《**多様な準備状況にある学生が一緒に受ける初年次教育の意味づけを考える必要性**》《**学習の成果の評価を教員と共有することによる目標の明確化**》《**学生が学び方を学ぶための支援**》《**社会人基礎力の醸成**》が含まれる。

《**学生の主体性に働きかける教育**》は、様々な背景や特性、準備状態の学生が主体的かつ能動的な学習姿勢を確立するための働きかけやその工夫を示す。《**教員が学生を信じることの重要性**》は、学生の背景や準備状況が様々である中でも、学生を教育する際に教員が信念を持ち続けることの重要性を示す。《**グループダイナミクス**

による学生一人ひとりに自分の役割を意識させる教育》は、学生の主体的、能動的学習態度を確立し、大学での学びを効果的に進めるための工夫を示す。《**学生の失敗をも学習の機会として捉える雰囲気づくり**》および《**どんな時でも学生が意見や考えを他者に表現できることを大事にした働きかけ**》は、学習経験の積み重ねが乏しく、自分の考えを持つことを恐れたり、学習による達成感を得た経験が少ない学生への支援の工夫を示す。

《**多様な準備状況にある学生が一緒に受ける初年次教育の意味づけを考える必要性**》および《**学習の成果の評価を教員と共有することによる目標の明確化**》は、効果的な学習の仕組みや仕掛けを模索し工夫する教員の知恵や工夫を示す。

《**学生が学び方を学ぶための支援**》および《**社会人基礎力の醸成**》は、大学教育を通して、学士教育において学生が習得すべき技能の獲得を促すための具体的な方略である。

#### 4. 2. 5 カテゴリ5 【特別な配慮、個別的な支援を必要とする学生への支援体制づくり】

【**特別な配慮、個別的な支援を必要とする学生への支援体制づくり**】は、1つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《**初年次教育を通して把握した個別的なフォローが必要な学生支援の仕組みづくり**》が含まれる。

《**初年次教育を通して把握した個別的なフォローが必要な学生支援の仕組みづくり**》は、生活上の問題を抱えていたり、集合教育では効果が得られにくいような認知特性をもつ学生を早期に支援体制に乗せ、適切な支援が届くための取り組みを示す。

#### 4. 2. 6 カテゴリ6 【大学教育の意味に基づいた学生の価値の醸成を意図した働きかけ】

【**大学教育の意味に基づいた学生の価値の醸成を意図した働きかけ**】は、3つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《**社会の課題や専門教育への興味関心を喚起**》《**正解のない問いに対する答えを考え続けていく必要性の伝達**》《**建学の理念の実現に向けた働きかけ**》が含まれる。

《**社会の課題や専門教育への興味関心を喚起**》は、社会の課題の解決に向けた自らの取り組みを動機付けるという初年次教育の方向付けを示す。《**正解のない問いに対する答えを考え続けていく必要性の伝達**》は、社会の課題解決は答えがあるものではなく、最適解を探し続けていく態度を身につけることを示す。また、《**建学の理念の実現に向けた働きかけ**》は、各大学はそれぞれの方針に基づいた教育カリキュラムにそった教育内容の構築や方向性を示す。

#### 4. 3. 初年次教育の効果 (表2参照)

初年次教育の効果は、5つのカテゴリから構成されている。カテゴリには【初年次教育の学生への効果】【学生のキャリア形成への効果】【教員への波及効果】【組織への効果】【初年次教育の仕組みへの波及効果】が含まれる。

##### 4. 3. 1 カテゴリ1 【初年次教育の学生への効果】

【初年次教育の学生への効果】は、7つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《自学の理念を身につけた学生に成長》《堂々と学習成果をプレゼンテーションできるまで、学生が変化》《意見や考えを他者に表現》《学習環境を整えれば変化する学生》《チーム学習/グループダイナミクスの経験で学生が自ら変化できること理解》《学生が教員と出会う場》《学生が学生同士や先輩とのつながりを得る》が含まれる。

《自学の理念を身につけた学生に成長》は、卒業後の学生の活躍から教員が実感した効果を示す。このサブカテゴリは、初年次教育を継続的に取り組んだ結果から得られた長期的な成果である。

《堂々と学習成果をプレゼンテーションできるまで学生が変化》《意見や考えを他者に表現》は、学生が大学における学習技能を習得し、技能を活用し応用できるまでに習熟したという効果を示し、短期から中期的な効果である。

《学習環境を整えれば変化する学生》および《チーム学習/グループダイナミクスの経験で学生が自ら変化できること理解》は、学生が主体的、能動的学習をみにつけるための効果的な仕掛けその効果を示す。

《学生が教員と出会う場》および《学生が学生同士や先輩とのつながりを得る》は、人と人との繋がりの中で学習環境を学生自身が整えられた、その背景を示すものである。

##### 4. 3. 2 カテゴリ2 【学生のキャリア形成への効果】

【学生のキャリア形成への効果】は、2つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《教員との目標共有により繋がる学生のキャリア形成支援》《保護者に対する入学時から卒業時のイメージづくり》が含まれる。

《教員との目標共有により繋がる学生のキャリア形成支援》は、学生が初年次教育教育をきっかけに、キャリアについて考え、学習への動機付けに繋がった効果を示す。

《保護者に対する入学時から卒業時のイメージづくり》は、保護者が大学教育の教育内容とその効果を理解し、学生のよき支援者となることの効果を示す。

##### 4. 3. 3 カテゴリ3 【教員への波及効果】

【教員への波及効果】は、3つのサブカテゴリから構成

されている。サブカテゴリには《学生への教育効果について教員の実感の深まり》《教員が捉えている学生実態の教員間での共有により明らかになった学生の課題》《初年次教育の経験による教員の教育力向上》が含まれる。

《学生への教育効果について教員の実感の深まり》は、初年次教育に対する手応えなど、教員が抱く実際の感覚を示す。

《教員が捉えている学生実態の教員間での共有により明らかになった学生の課題》は、初年次教育がなされなければ得られることのなかった学生に個別的な支援ニーズの共有の効果を示す。

《初年次教育の経験による教員の教育力向上》は、初年次教育経験により、関わった教員自身が得た効果を示す。

##### 4. 3. 4 カテゴリ4 【組織への効果】

【組織への効果】は、1つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《外部資金の獲得》が含まれる。《外部資金の獲得》は、継続的な取り組みにより、外部への発信、外部からの評価を得たという効果である。

##### 4. 3. 5 カテゴリ5 【初年次教育の仕組みへの波及効果】

【初年次教育の仕組みへの波及効果】は、3つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《学生フォロー体制の強化》《学生の意見を取り入れながら変化させるカリキュラム》《学生が教員を選べる自由の保障》が含まれる。

《学生フォロー体制の強化》は、初年次教育教育の取り組みにより明確になった学生の個別ニーズについて、フォロー体制整備や強化の必要性が浮き彫りになったことを示す。

《学生の意見を取り入れながら変化させるカリキュラム》は、学生の意見を取り入れることが、よりよい初年次教育構築のために効果的であったことを示す。また、《学生が教員を選べる自由の保障》は、初年次教育を効果的にすすめるためにも、学生がどの教員にも質問や相談できる自由の保障が重要であることを示す。

#### 4. 4 初年次教育の課題と展望 (表3参照)

初年次教育の課題と展望は、3つのカテゴリから構成されている。カテゴリには【入学前から卒業までの一貫した学生支援の仕組みの確立の必要性】【より効果的な教育方法の検討】【カリキュラムの質担保の困難】が含まれる。

##### 4. 4. 1 カテゴリ1 【入学前から卒業までの一貫した学生支援の仕組みの確立の必要性】

【入学前から卒業までの一貫した学生支援の仕組みの確

立の必要性]は、2つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《効果的な初年次教育の企画、実施、評価、改善の仕組みの確立の必要性》《入学前教育からの連続性の担保とその困難》が含まれる。

《効果的な初年次教育の企画、実施、評価、改善の仕組みの確立の必要性》は、今後の課題として、初年次教育

の充実が挙げられ、そのための教育の質改善とその仕組みの確立の必要性を示す。

《入学前教育からの連続性の担保とその困難》は、入学試験を経ずに入学していく学生への教育効果を最大化するために、入学前から教育を開始する必要があるが、その実施については困難を伴うことを示す。

表2. 初年次教育の効果

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的なコード ( )内は研究参加者ID
初年次教育の学生への効果	自学の理念を身につけた学生に成長	・ 大学評価を通じた実施調査から、自学の理念が学生に確実に浸透している印象がある。(A) ・ 自学の理念をよく理解し、いい人材に育ってくれている。(C)
	堂々と学習成果をプレゼンテーションできるまで、学生が変化	・ どういうことがプレゼンテーションなのかというところまで教員がパフォーマンスして教えていくと、学生たちがどんどん変わっていく。(B) ・ 初年次教育によりグループワークや発表ができるようになる。(D) ・ 実習後の成果発表で活かされていた。(E)
	意見や考えを他者に表現	・ 意見や考えを持つことができる。(B)
	学習環境を整えれば変化する学生	・ なぜここまでできるかというのは、人の可能性。学習環境さえ整えればこと人たちは変化していく。(B) ・ 指導を真摯に受け止める学生は学力が伸びるという実感がある。(D)
	チーム学習/グループダイナミクスの経験で学生が自ら変化できること理解	・ 様々な背景の学生がおり、最初は意見交換ができない学生もいるが、誰一人休まない。(B) ・ AI時代に入っても通用する、意見を人に言えるとか、相手が求めていることに対して答えられるなど、その関係性づくりの経験こそが一番大事。(B) ・ 仕掛けにより学生の成長の手ごたえがある。(D)
	学生が教員と出会う場 学生が学生同士や先輩とのつながりを得る	・ 学生が教員と知り合える機会にある。(E) ・ 先輩からの情報を得るなど、つながりの意味づけが非常に大きい。(E)
学生のキャリア形成への効果	教員との目標共有により繋がる学生のキャリア形成支援	・ チューターとの面談時には初年次教育のポートフォリオを持っていくように学生に伝え、活用できるようにし、キャリアガイダンスにつなげる。(B) ・ 保護者にも学習状況や態度を共有し、協力を求める。(D) ・ 保護者に対して入学時から卒業時をイメージできるように働きかけをする。(D)
	保護者に対する入学時から卒業時のイメージづくり	・ 各教員も初年次教育の効果を実感していると感じる。(A) ・ 初年次に手厚い教育をすることでその後の学修が円滑に進むという期待を持たせる。(D)
教員への波及効果	学生への教育効果について教員の実感の深まり	・ 教員間で各教員が捉えている学生の実態を共有したことで、学生の課題が明らかになった。(A)
	教員が捉えている学生実態の教員間での共有により明らかになった学生の課題 初年次教育の経験による教員の教育力向上	・ 初年次教育の学生を見るという授業の展開方法を見せることで、先生が変わっていく。(B)
組織への効果	外部資金の獲得	・ 初年次教育を継続してきたことが外部資金獲得につながった。(C)
初年次教育の仕組みへの波及効果	学生フォロー体制の強化	・ 学生の課題が教員間で明確になったことで学生フォロー体制の強化につながった。(A)
	学生の意見を取り入れながら変化させるカリキュラム	・ 教育目標がずれないような形で学生の意見を聞きながら、変化させた。それは、学生が学びやすいということ。(B)
	学生が教員を選べる自由の保障	・ 以前は、担当教員が決まっていたが、学生が好きな先生に好きな時に相談できるように、学生も相性があるでしょうから、先生を自由にした。(B)

表3. 初年次教育の課題と展望

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的なコード ( )内は研究参加者ID
入学前から卒業までの一貫した学生支援の仕組みの確立の必要性	効果的な初年次教育の企画、実施、評価、改善の仕組みの確立の必要性	・ 持続可能な教育上の仕組みとして確立していくことが課題である。(A, F) ・ 科目数が多く学習が統合されにくいという現状がある。(D) ・ 大学の理念を身につけられるように工夫したい。(E) ・ 学生間で学び合える仕組みづくりをしたい。(E) ・ 他を知ることで視野が広がる経験になるので、他学部と協働した仕組みが必要。(E) ・ 到達目標を決めて評価項目を作る必要がある。(E)
	入学前教育からの連続性の担保とその困難	・ 初年次教育の充実とともに、入学前教育の充実を図ることが必要である。(A) ・ 入学前教育の足並みを揃えることが困難な実情がある。(D) ・ 入学前教育の課題提示方法と評価の位置付けの工夫をしている。(D) ・ 入り口と出口の一貫性のある教育の必要性を実感。(D)
	より効果的な教育方法の検討 仕組みづくり	・ 学生にとって、もっと使いたくなるようなポートフォリオの工夫。(B) ・ 学習指導だけでなく心理面生活面の指導を統合する必要がある。(D) ・ 初年次教育の工夫はこれからということになる。(E)
	初年次教育でのつまずきがその後の学習に悪影響	・ 初年次教育でのつまずきがその後の学習に悪影響する。(D)
	予算の確保の重要性	・ 初年次教育でPBLを実施するために予算を確保することが必要であり、そのためにエビデンスを示す必要がある。(C)
学問領域の違いによる初年次教育の目標共有の困難	学問領域の違いによる初年次教育の目標共有の困難	・ 能力が大事と言われているが、「知識」が重要という考え方の学問もある。(C)
	教員の教育能力の向上が必要	・ アクティブラーニングは教員の能力が要求される。(C) ・ 教員には学生の成長につながる戦略を立てられる手腕が求められる。(D)
	初年次教育にかかる教員の負担軽減の必要性	・ 初年次教育は教員の負担がある。(D) ・ 初年次教育を手厚くしても、学生の反応が薄い。(D)
	初年次教育の評価の困難	・ 初年次教育の評価をどう考えたいか改めて考えると難しい。(F)
カリキュラムの質担保の困難	カリキュラムの質担保の困難	・ 教育システムを作っても理解できていない人がいたらすぐに崩れる。(C)



#### 4.4.2 カテゴリ2 【より効果的な教育方法の検討】

【より効果的な教育方法の検討】は、7つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《学生の学習意欲の向上を意図した仕組みづくり》《初年次教育でのつまづきがその後の学習に悪影響》《予算の確保の重要性》《学問領域の違いによる初年次教育の目標共有の困難》《教員の教育能力の向上が必要》《初年次教育にかかる教員の負担軽減の必要性》《初年次教育の評価の困難》が含まれる。

《学生の学習意欲の向上を意図した仕組みづくり》は、学習意欲そのものに困難を抱える学生が増加しているという現状に対応し、より効果的な方策や仕組みづくりの課題を示す。《初年次教育でのつまづきがその後の学習に悪影響》は、初年次教育でつまづきがあった学生への支援の課題を示す。《予算の確保の重要性》は、初年次教育の充実を図るためにも予算確保が重要となることを示す。《学問領域の違いによる初年次教育の目標共有の困難》は、複数学科共通で初年次教育を実施している場合に生じる目標共通の困難を示す。《教員の教育能力の向上が必要》は、多様な学生に対して教育的な効果を最大化するためには、教員自身も自らの教育能力を図る必要があることを示す。《初年次教育にかかる教員の負担軽減の必要性》は、初年次教育の充実を図ると、その一方では教員の労力が増えていくことになるので、負担の軽減が課題であることを示す。《初年次教育の評価の困難》は、より効果的な初年次教育の構築のためにも、評価が重要となるが、客観的な評価指標がないことから評価が困難であることを示す。

#### 4.4.3 カテゴリ3 【カリキュラムの質担保の困難】

【カリキュラムの質担保の困難】は、1つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには《カリキュラムの質担保の困難》が含まれる。

《カリキュラムの質担保の困難》は、担当教員の変更によりカリキュラムの質の担保が難しくなる現状を示す。

### 5. 考察

#### 5.1 初年次教育の背景と現状

初年次教育の背景と現状として、【大学への適応に支援を要する学生】【学生の環境適応に向けたケアの必要性】【学生の主体的・能動的な態度醸成を意図】【特別な配慮、個別的な支援を必要とする学生への支援体制づくり】が示された。これらは、初年次教育は、18歳人口の減少と学力低下問題に端を発するが、実際には学力低下だけでなくとどまらない多様性をもった学生を目前にし、従来どおりの大学教育では十分ではないことから始まっている<sup>6)</sup>とされているが、今回の結果は、多様性のある学生が入学してくる看護系大学の現状を浮き彫りにした

結果であると考えられる。

また、【大学教育の質的転換への対応】【大学教育の意味に基づいた学生の価値の醸成を意図した働きかけ】が示された。これらは、2017年「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標<sup>7)</sup>が策定され、看護系大学が学士課程のにおける看護実践能力の取得を目指して、初年次から学士課程の学生を育てることを意識して教育に取り組んでいることを反映したと考えられる。

#### 5.2 初年次教育の効果

初年次教育の効果として【初年次教育の学生への効果】【学生のキャリア形成への効果】が示された。これらは初年次教育の成果として、議論の質を深める操作的トランザクションの多い議論は、思考スキル、表現のスキルといったスタディスキル習得に関係している<sup>8)</sup>という報告や、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」といった社会人基礎力に影響した<sup>9)</sup>という先行研究結果を支持するものである。

また、【教員への波及効果】【組織への効果】【初年次教育の仕組みへの波及効果】が示された。これらは先行研究では明らかになってない。初年次教育が学生との相互作用としてさまざまな効果をもたらしていると考えられる。

#### 5.3 初年次教育の課題と展望

初年次教育の課題と展望として【入学前から卒業までの一貫した学生支援の仕組みの確立の必要性】【より効果的な教育方法の検討】【カリキュラムの質担保の困難】が示された。小口<sup>10)</sup>は「看護系の学生は看護職への動機をはっきりしていることや国家試験というひとつの目標もあり、一般大学に比較すると、初年次教育に関しては出遅れている感がある。また始めていても試行錯誤の状態である」と述べている。今回の研究で明らかになった初年次教育の背景と現状からも多様な学生が入学してくることを踏まえると、今回明らかになった課題は看護系大学が課題解決していくべき事項だと考える。

### 6. 本研究の限界と転用可能性

本研究は、6大学の教員の経験や認識を質的記述的に分類整理したものであるため、もとより一般化には限界がある。しかし、研究参加者の経験や洞察から得られた看護系大学の初年次教育に共通する特質が描きだれたものであることから転用可能性はあると考える。

### 7. 結論

初年次教育の背景と現状として、6カテゴリ【大学への適応に支援を要する学生】【学生の環境適応に向けたケアの必要性】【大学教育の質的転換への対応】【学生の



主体的・能動的な態度醸成を意図】【特別な配慮，個別  
的な支援を必要とする学生への支援体制づくり】【大学  
教育の意味に基づいた学生の価値の醸成を意図した働き  
かけ】，初年次教育の効果として，5カテゴリ【初年次教  
育の学生への効果】【学生のキャリア形成への効果】【教  
員への波及効果】【組織への効果】【初年次教育の仕組  
みへの波及効果】，初年次教育の課題と展望は，3カテ  
ゴリ【入学前から卒業までの一貫した学生支援の仕組  
みの確立の必要性】【より効果的な教育方法の検討】【カリ  
キュラムの質担保の困難】が示された。

## 引用文献

- 1) 野原真理，遠藤由美子，山崎智代他：看護系大学に  
おける初年次教育の授業展開と学生の動機づけの実  
態. 医療保健学研究, 5, 141-157, 2014.
- 2) 中央教育審議会大学分科会：学士課程教育の構築に  
向けて. 2013. [http://www.mext.go.jp/component/  
b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2013/  
05/13/1212958\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_001.pdf) (参照2018-08-28).
- 3) 豊嶋三枝子，小口多美子：看護系大学における初年  
次教育の実態 教員への質問紙調査から. 日本看護  
学会論文集：看護教育, 40, 140-142, 2010.
- 4) 澤田忠幸，鳥居順子，草薙康城他：愛媛県立医療技  
術大学における初年次教育の取り組みと課題. 愛媛  
県立医療技術大学紀要, 7 (1), 29-35, 2010.
- 5) 富樫千秋，市原真穂，吉野由美子他：全国看護系大  
学を対象とした初年次教育の実態. 千葉科学大学紀  
要, 12, 223-230, 2019.
- 6) 久司一葉：看護専門学校生の多様化と初年次教育. 佛  
教大学大学院紀要教育研究科篇, 39, 1-18, 2011.
- 7) 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課  
程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指し  
た学修目標への策定について, 2017. [http://www.  
mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/078/  
gaiyou/1397885.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm) (参照2019-09-30)
- 8) 徳本弘子，添田啓子，國澤尚子他：初年次教育の成  
果 議論の質とスタディ・スキルズ習得の関係. 日  
本看護科学学会学術集会講演集 29回, 398, 2009.
- 9) 新野由子，糸井和佳，清野純子：看護学士課程1年  
生の社会人基礎力の変化(第1報) 初年時教育の基  
礎ゼミを通して. 帝京科学大学紀要, 15, 1-9, 2019.
- 10) 小口多美子，豊嶋三枝子：看護系大学における初年  
次教育について重要視している点 学部長と教員の  
比較. 日本看護科学学会学術集会講演集29回, 398,  
2009.